

古河志

上ノ下

特別

リ5

15773

2

15
15773
-2



古河志卷之上地

○古河城北 地名も亦崔家と云

一正一位崔大明神社 一字

祭神 大己貴命

市多末

社領十石

本地 觀世音菩薩 定朝作

市多末

古河十石

神宮寺

此社古河町二丁目
安河十八日
夕陽社

神祇子記福也 只傳説子中古出雲の國大社より遷居

者一と平年月 知以次加茂氏より亦先祖不分明也と文祿
中豊臣氏要白紙封國名古河陣の所中宮系家乞中々

藤浪氏藏

大宮司 加茂隱岐權守

外高古と云宗祇氏

古河町二丁目

信從せし子軍中より死する當分の原書今も秘藏
 され居る此の男子と母とより遺りたれて下社を
 祠伊織と云ふ所の有担しあるうち社祿ともうと
 以ぬる等の男子あり神祇と云ふ古伝といふと

社頭彫口

指板
 一尺穿弱



按此子弘治三年ハ晴氏北条家より
 といひ以て波多野子家秘藏せり此氏
 ありと一実家よりつくりされハ
 此所為るハ晴氏の室山系氏
 ありて氏康の姉妹あり

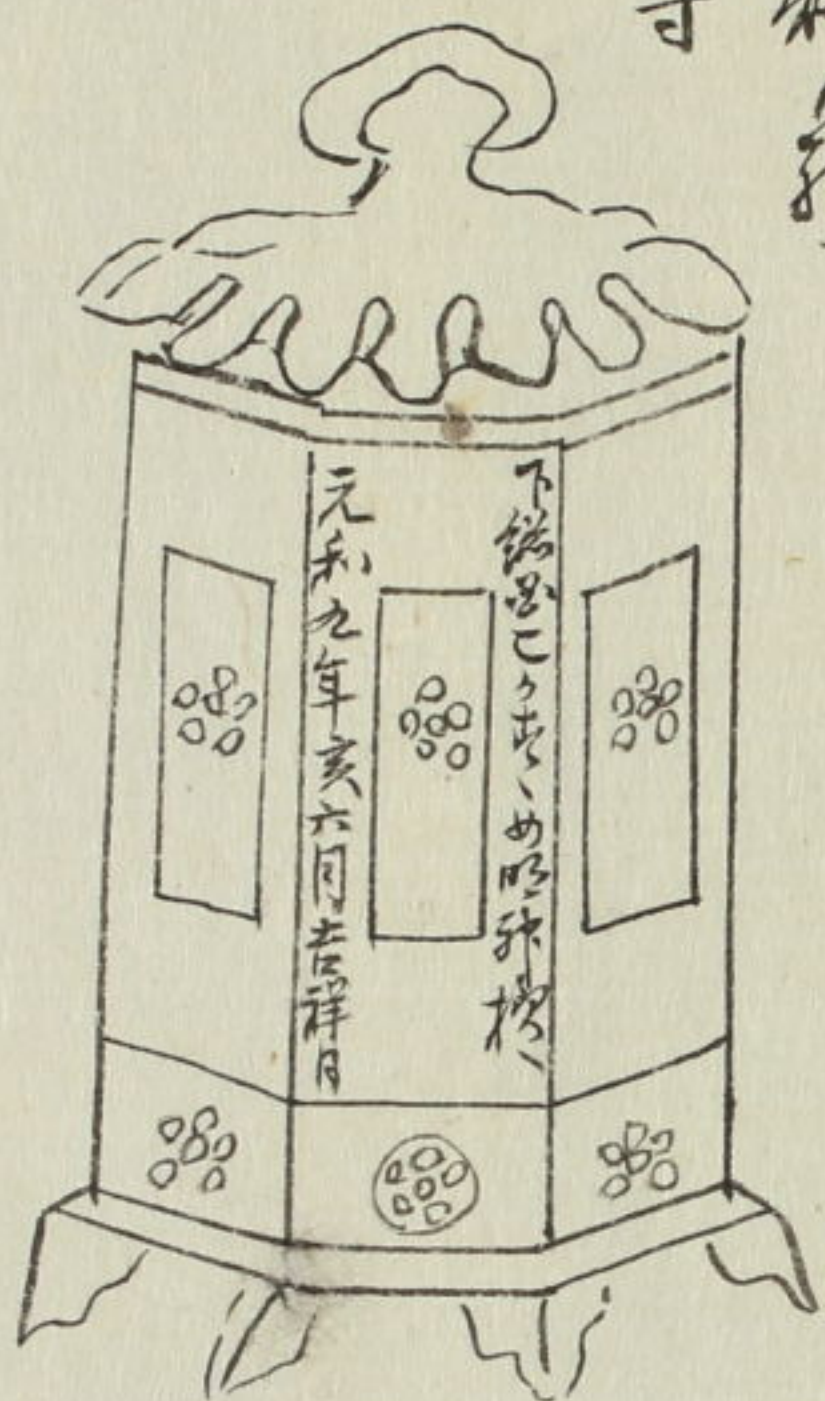
同く是の御燈

燈高サ一尺二寸

六角

下間

三寸ツ



松平丹波守康長親長自安
 信別松平より安をせ
 也とりふ

里俗のいひ傳ふるものと日光道中 下野至崔宮記
 明神を勧誘しある等り昔ハ今の地より城下
 河原といふ所より在りといふハ中河原の
 家初め社地といふさうなる祠をたてて旧社を
 其外後ハ新説といひてさういつれを何れと定む

一又崔多輝々々當地の初詣のそと大聖院なる
山王へ神樂をかりておこなふなり一俗を以て毎年神子
出仕の時此山王祖の神輿をたて安しそ
通より臨みいれおこなふなり又崔多輝の神子
常よりつる孫起よはは成りて其後へさあられては
常於へ宅とんとて世にそく成りては其の魂
崔多輝にそく成りては其の魂行なり一其の魂をた
て崔多輝神と号しなり其の魂をいつて祀りて也
とありとまゐりかゝるまゐり方々社後を以て所と
おそく從ふなり

○古河の幡所

一八幡宮 一字

神主

祭禮 八月十日

吉羽出羽

社記畧云文安三年録倉鶴岡乃八幡を勧誘し
當時才三の郭内子一庵社をおこし田畠十五石を
附し給ふ神座一石九拾五年を以て是に才井氏
の所領あり當時寛永十九年郭内鬼の地を以て神社の
興隆を以て遷宮をこし而今八幡所神社也政氏
公言其公義氏公神官傳奏し所教也三通斗り僅に
附しと云々系主の所より下持其秘物也野

一小山記畧云其の記録より大永元年辛巳甘棠
院殿政氏より常子因て録倉鶴岡を傳内子勧誘を

古河元より城内より廿年より後、寛政十九年壬午の地へひと
寛政十九年
とあるに
あり此方とて一社記の中よりけり一とある成氏

いふ、永末度とす一社の記の中よりけり一とある成氏

当社よりいふ所

数ある所より上と雖

ハ情より信より上と

社安也とある可

有る所創成は

二月十六日

政氏押

当社より事と雖
是ハ情より信より
上と神官よりある
可有る所創成は

七月十六日

高基の
政氏押

当社より事と雖

是ハ情より信より

上と神官よりある

可有る所創成は

八月十六日

政氏押

○古河北新町

一正八幡宮一字

古河本山修造
日永橋所
中野橋末
大樂院

社記畧曰當社者往昔在古河諏訪之地公方成氏
公之創建攸勸請相摸國鶴岡之神也成氏公為孩
提之兒僭居信濃國其間尊崇此神祈誓再興有年
畧康正元年從于古河斯時仰遂古之冥助抽後來
之精誠遐準鶴岡迺祀諏方是當本城之良隅為當
所鎮守云々當院自古在其地久矣畧寛永十三年
構當一郭於諏訪之地而則名諏訪郭于時當社暨
當院移當所新町矣尚存小祠於舊地畧尔後罹災
畧元禄中松平伊豆守源公信輝為古河城主老臣
松井土郎右工門源真紹宅地于諏訪別當宗正詣

宅地之小祠具託由來真紹知為宅地与新町同社
然當地宮祠良覃傾廢同十年改造靈宮尊像弘法
大師之作
其功就矣真紹依渴仰之丹心至誠之有基者也勸
請之初自康正年中至于今二百五十有餘年後地
造當自寛永十三年至于今七十四年中間罹祝融
之災緣起宝物等及烏有焉於今少以當院之傳
記末歷畧下

別當

寶永六己丑四月十五日

大樂院宗正

以つゝちりも縁起の信用一うなむもの多しあはれ
といふ所ありしをいふもいふなりとともおもふべきなり

一 録 此 乃 子 孫 紹 承 之 綱 目 録 也 以 此 而 知 之 也
其 後 亦 有 一 冊

○古河天神所

一 後宮 一 宇
一 茶師堂 一 宇

画像掛幅 極彩色古作家の筆
未由不知

為當時義孝公之宗 古河所三所
其後亦未

茶王山

地福院

縁起畧曰真言宗地福院者在徳州葛飾郡下河邊
莊古河城下也畧自從一開基之以降可下百二十

年^九于今畧^中昔日正親町院永祿之年比丘良識始建
此院才二住僧曰賢真才三曰賢俊才四曰俊登才
五曰惠實才六曰宥傳畧傳也畧進法印安置於天
滿大自在天神畧余旧友平田教吉奉從其前主中
大夫日州牧源信之公轉領於當城而自和州郡山
移一家於此時乙丑秋九月也未遑點檢配授諸士
之家宅而若教吉亦暫寄寓於地福院主宥傳懇遇
之既渥矣一日問曰定有天滿宮縁起葉欲觀傳曰
未^レ在焉畧我幸有舊朋事文藻者請彼書神之始末
以獻納管宮畧貞享五年戊辰秋二十有五日丹後

興謝、後學知命、疑村、夫、謹、中菱席の申志をいふ
只菱公の傳記の事を
き多、仍て下ハ
男、也

一 一説、子日、善天神と号、其、昔、廣土、日、善、七、部、た、ま、り、と、り、ふ
去、后、後、内、子、ま、た、り、置、を、七、部、た、ま、り、福、后、を、常、七、ら
出、る、所、あ、り、跡、あ、り、と、も、又、世、下、七、部、た、ま、り、位
し、み、あ、り、年、次、日、善、家、を、傳、り、つ、る、善、後、を、保
家、を、あ、り、へ、き、ま、の、ち、に、其、世、下、七、部、た、ま、り、と、り、ふ
方、今、日、暮、家、と、い、ふ、所、と、い、さ、り、ん、え、た、ま、り、と、り、ふ
と、答、へ、り、又、山、經、書、に、記、録、し、い、寛、永、元、年、甲、子
法、平、賢、俊、開、卷、と、あ、り、是、れ、終、焉

○古河片町

淨土宗 上野玉徳林
后、通、寺、末
法、藏、山、家、地、院

正定寺

一 一、古、河、片、町、に、在、り、し、時、の、地、主、は、從、々、の、所、有、り、と、も
或、は、大、工、所、を、今、う、西、寺、の、あ、り、と、あ、り、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、
後、に、し、る、は、以、來、の、寛、永、の、昔、世、の、志、傳、に、記、録、し、時、乃、古
後、を、以、て、據、據、と、し、る、と、い、ふ、の、為、に、其、の、姓、名、并、古
社、等、の、法、主、の、名、を、記、録、し、時、乃、古、河、片、町、に、在、り、し、
と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、
西、寺、と、元、和、七、年、草、創、と、あ、り、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、
西、寺、と、元、和、七、年、草、創、と、あ、り、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、

かゝる中、以て志別多し。又、此處唐津と云ふ
ら也。孫ふとも、家人と云ふ。――其、所と云ふ。――
多し。以て、唐津と云ふ。あてたまへ。唐津と云ふ
、此、より、多し。あてたまへ。家人の、唐津と云ふ。
て、――孫ふとも、家人と云ふ。

一、許我志、子畧縁起の文を載て曰、下総國葛飾郡古
河城畔寶地院證誠山一名利正定寺者土井大
炊頭從四位侍從源朝臣利勝公之開基也。開山、現
蓮社當譽上人直阿玄哲大和尚者大和國之產也。
父藤原元久者。

楓軒翁云元
明帝ハ女帝
也苗裔ト云
智國師之
疑之

元明天皇之苗裔也。然武江増上寺十二世普光觀
智國師之高弟也。同寺十三世之主定蓮社正舉上
人廓山大和尚者奉蒙
征夷大將軍源家康公
之台命至南都修學法相宗。其砌元久正譽上人信
敬以次男授上人。為才子。令出家。名玄哲。上人歸増
上寺住職。則玄哲師隨從修學。則觀智國師之法孫
也。一日於増上寺本堂。正譽上人揚法幢。令三千大
衆集會。宗門之法義論給。誠教尊在世靈山會上。如
說法。其時玄哲在。法戰場振智惠之劍。大衆對論之。
砌見或僧口猛火吐。餘人不見之。玄哲忽厭名利。學

道退席專修念佛之外無他事其頃幡隨上人才子
而隨波上人大野村等持院正定寺依法錄隨波上
人之以世活彼寺令住玄哲玄哲上人於彼寺念佛
三昧無怠故四未之貴賤尊敬之知如未上人念佛
之間以六字名号書為業然寬永二乙丑八月師正
誓上人入寂御年六十六歲于時玄哲上人師別悲
淚不止有為之無常念飲永淨土志陪深彼寺隱居
而古河城下了正寺閑居而念佛無怠寬永三寅年
九月十五日 征夷大將軍源秀忠公之御臺所
薨去給御導師增上寺十四世衆誓上人了的大和

尚也御臺所尊體奉葬同寺御法名奉號崇源院殿
一品大夫人昌誓和興仁清大禪定尼御葬式御中
陰之間了的上人之依召玄哲上人登山方丈逗留
而御法席出勤於此時 土井大炊頭利勝公御法
席御在玄哲上人見給御法事後玄哲召問曰和尚
今何地住耶答言今古河大工町了正寺隱居由言
上公曰惜哉明珠泥中入深歎之御中陰內增上寺
方丈了的上人之依言上方丈御法類附玄哲上人
始御法類之僧衆皆何奉拜 台願有時玄哲上人
利勝公神田之御亭拜參其後玄哲上人飯沼弘經

寺方丈業譽還無大和尚布薩大戒受然寬永十年
癸酉 土井利勝公從佐倉古河移給無程依御尋
玄哲上人登城御目見誠不思議因縁也 公甚喜
悅不斜御在城砌依御望布薩大戒并日課御念佛
三千遍奉授之其節奉授御法名御在世中 寶地
院殿穩譽泰翁覺玄大居士以思召當寺御建立之
砌御院號當寺之院号成給于時寬永二十一年七
月十日 公逝去給開山玄哲上人悲歎之淚袖餘
啼々出府而至御葬式場燒香拜礼誦經念佛而奉
廻顧同年八月十五日五七日御相當於當寺持千部

御法事有之太守 遠州公態々御歸城御法事後
御船而御參府云千部御法事節錄倉田覺寺岫雲
玄端禪師當寺未御牌前奉捧御追善之一章今
尚當寺現在下小山親多古徳源子ハ開山古井室江寺殿所
年古井用防寺殿除也云所却及六歩所當附とあり銘記と趣
對也ハ正定寺寺名の所當附とありハ中因新因名を平方の力所
也

一 鐫樓堂

正定寺撞鐘銘

下総國葛飾郡古河城畔證誠山正定寺者淨土三
昧之道場而法基九品之上界也 利隆奉為先

考從四位侍從大炊頭新鑄華鐘以寄之於是令舍
弟利長利房利直造建幹柱而架之嗚呼先考蒙三
代不次之賞遺一家無窮之福是故今作小善聊以
報謝焉銘曰

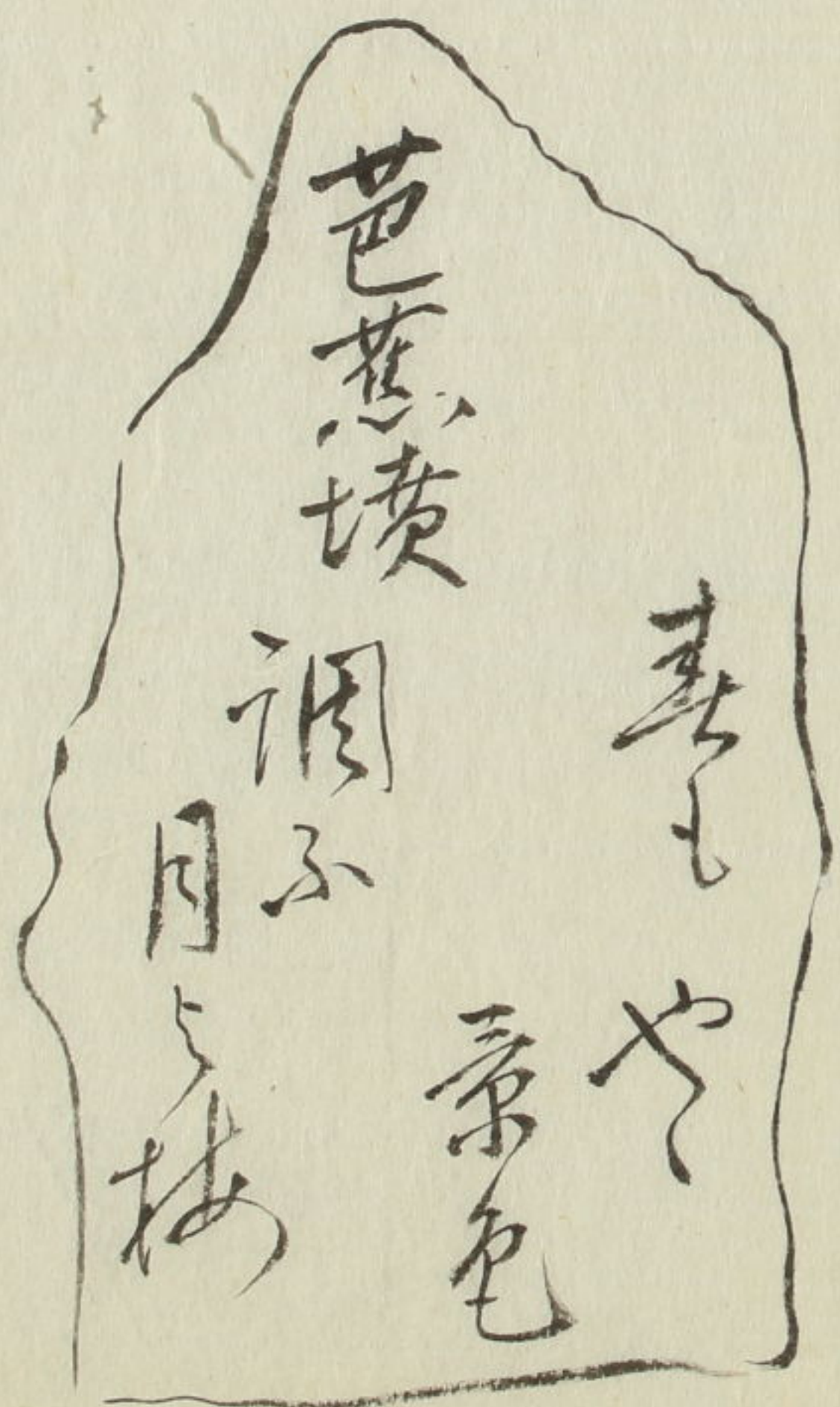
正定蓮社法筵儼然一幹直立九乳所懸前拂塵耳
驚破昏眠下徹阿鼻上達梵天德音無盡人間永傳
願施此志結淨域緣

正保乙酉年七月十日檀越古河城主
從五位遠州太守
源姓土井利隆

民部卿法印道春撰

江戶鑄物師
椎名兵庫頭吉綱

一中門乃內子芭蕉塚也



一寶樹院殿師寶塔

壹基

当方二世梵譽宗跡上人の事記を案ずるに并山當卷
上人法牙子海蓮社信譽上人宗妻和為年慈三年三
月有甘安事と云寂以此僧所才のちぢみとて
少くは鐘磬を建てる事と云記をり

○古河横所

日蓮宗 藤野
おきち末
そふ山

一 印多下
古領十石

本成寺

此寺もとい同本橋島郡伏木村より年一を日禪聖人
住持迎賓中ふの地は移し給ひとい云聖人を大
肉の地中川縫殿殿長女二男也長女ハ 法昌院
殿の所をりり 法昌院殿ハ 諸言殿利益君

力所生母まゝ一やせ八ふの俗縁を以て城町に移し給ひ
一 法昌院殿所遺骸ありと云あり 所を解
とあると云と云給ひて香花の料年出と云と云給ひ
五徳り、宗勢たるなり

一 鐘樓あり鐘跡と云と云なり

嘉曆三戊辰年摩訶一院日印上人開基

一中興大僧正日禪聖人 門外碑に法字彫たるあり

一中川縫殿殿の裔々ハ世々なりて檀家といふ古キ
知謗拙記中卷勅修寺家 寛保申の事

甘露寺祖 北間十世 又十二 嗣長 三木
為輔 畧 世畧 二四位 冬長

貞長

縫殿頭

輝長

右工門左
正五位

為任

右衛門
正五位

晴長

以下天保八年西極
雲上明覽及補

嗣晴長

代長 榮長 敬長 廣長 維長 哲長

○古河核所

新義吉云宗

江戸大塚
護持院末

龍見山舎那院極末坊

德星寺

此以跡法師
地堪子かき
落て車
や未詳

創原ハ建治元年城內跡法師ハ其初阿弥院堂并ハ幡宮
社六俣何建後德星九十六第ハ其跡至之礎礎山良
賢上人下向依勅命建治三年榮興成就六俣ハ慈眼
院常建院法意坊後我坊一林坊光教坊也

一德星丸ハ於跡ハ内松早立ハ其孫良賢上人ハ德星丸

ハ師範也知名明星丸トナ 将宇多帝ハ官仕ナリ

龍兄山トハ德星丸ハ祖母 高奈宮ハ内内多子

ハ女子ハ龍兄殿ト云ハ山号ト云ハ也

一古領苗田一万所 市奈附

一德星丸利髮海海上人ト云德星寺位祇才六代目

方里五代ハ良良存其良良良良也 名ハ其子ナリ

一新跡法師彼法師ト云ハ永享十年正月

一寶徳寺中成氏公御住持ハ以今市城ハ由新跡重

場ト定公御示ハ其跡法師重平ハ石仏位料 市奈附

亡ス

一德星寺僧張補任状ナリ通

大永二年七月十八日朝加同六年丙戌姑洗 新清
元龜四年癸酉十月新長^聖芝長十五年十月廿日新
賢

吾々万治年中火災^ノ御焼亡

一氏女孫清宗^ノ而後^ノ年天正十八年德星寺^ニ清
宗^ト移先年^ニ古井^ノ孫^ノ而後^ノ年^ニ而^ノ形^ノ上古^ノ河
橋^ノ所^ノ移^ノ中^ノ所

寛文二年七月上旬

利重公^ノ所^ノ伐也^{以上}

一千手鏡音堂 一字

淨雲院^ノ殿^ノ利重公^ノ所^ノ建立^ノ
万治四年^ノといふ

一鐘樓 鐘銘 摘要

総州勝區龍見秘窟德星盡忠良賢利物賴政神祠

如在髣髴八幡靈廟威光岨岨一人岳愛六院嚴物
權現鎮座甘露開門密雲含潤法輪震雷滿海滿慶
須智領財錄倉元帥避難築營代換人去兵革縱橫
齋田被掠殿倒房傾天朗勵志土井致誠照盛接武
信輝遂功苾蒭真際當仁謹終欲成法器聚丹陽銅
祝融騰躍蒲牢露躬^下享保六年辛巳年號也
此銘を^ノ見^ノて^ノも^ノ素^ノより^ノ新^ノ政^ノ祠^ノの^ノ所^ノあり^ノと^ノ明^ノら^ノれ^ノ
新^ノ政^ノ祠^ノの^ノ所^ノあり^ノと^ノ明^ノら^ノれ^ノ

一辨財天女社 一字 縁記一首あり^ノ俗^ノの^ノあや^ノき^ノ物^ノを^ノ

あら

越大檀那下總州古河城主從五位下松平伊豆守
源朝臣信輝公者武州河越前太守輝綱長子侍從
信綱之嫡孫也武總二州城地多修廢寺興復神社
畧中方今臣遊佐氏畧中今茲春道得大師遍照金剛所
造之弁財天尊像運命手工新造十五輩童子加之
修飾寄附于德星蘭若欲安瑜伽場畧中同緣西村氏
戮力一心欲營下神祠臣曰可也先屬住僧必須得其
地簡擇四遠此地卜食臣就所思允洽無爽由喜月
十二日穿地當夷基趾土中得龜々見久延頸前先
納新器驅人引塊土零々而雪積堤倏忽雲騰宛如

靈神之埏埴還疑洪鈿之造化改之不日成之加以
全廿三日戊辰已刻白蛇新池游泳長短莫測諸人
成群是之住僧携青竹挾接捕之徐々至岸僧思整
地齋戒次日已巳乃行御園祭遷ス之檢ス神書言神形
不定今穿之人力得也自天預獲前兆遂鳩工掄材
營構既成焉畧中華嚴經曰有一婦人名辨財能現種
々無量事須臾示作日月歲城邑豐饒大安樂是以
施与福智於衆生諸天之中無勝此尊者謹從三月
十二日起首至五月廿四日都事業畢以已巳廿五
日聊設香華供養遷宮乃任先兆此處名為龜龍島

畧惟時元祿十六龍輯癸未禩六月中畧致文新經
嘗辨天於城外之東北云々春蘭映池觀者忘歸秋
菊爭色遊人不倦鳥雁鴛鴦戲水奏歌矣稱之萬歲
大笑為樂

欣淨不才苾芻盛漱書

一此池子當年災ありたる不浄を去りてと再為し
及以しう池ありて一里と明如多官詔治町の火
災よりかりし時焼灰をとり埋めしとすうと水も
今も社の邊自然に地低くして於温多きと云ふ
傍あり記

一後山に墳墓

古鴻業
城主本堂院殿智山惠鏡大禪定門

墳面

左右記

清和源氏加賀美次郎遠光小笠原遠江守長經三
男幼名小笠原大三郎中比曰大倉孫次郎行房後
段根岸甲斐守信政右信政十世勘解由秀光者羽
柴筑前守伯母聲也卒後葬于龍見山德星寺祖父
勘解由政永上州群馬郡總社移住矣元祿十二己
卯九月再建 根岸權太郎

石背二 信政十三世孫 施主上州群馬郡總社根岸作右門後

住人 同 甚兵衛政昭

秋元但馬守内 根岸総兵衛政利

は墓ハ遺骸を埋し平とてたをれを秋元家へ申うを
求てもうつれとも今日根岸強多来といふ者の家し
といへりされハ世に永ハ是勝少老好くそ元孫の秋
元侯へ仕たりしものハ墓建しとや相傳ふと云ハ武
家の傳ふやと思へとも正室古伝傳のうきたりし
物よりれハ苗領の傳ふ村なりしと云ふ家も仕へた
おちりしと見えたり

一苗令苗傳の新歌ををりたしむハ此者の末七若
ちうくもと法とありしと打續き無任うちたれハ本寺

はちと修りしと云ふ苗令七若とて新歌の修法
傳ふと絶ゆきたりと傳ふも現任うたり

○長谷村

新義寺云宗 其の傍所
傳ふも未

明観山經多院

市井系

一 ち領十石

長谷寺

本寺十一面觀世音堂

長ケ一丈七尺八寸

明應年中より源成氏公の梅君より新義寺傳ふ鬼
門より陰倉の長谷觀音を傳ふ此地より安永堂
令に建立して此新義寺傳付て存傳ふ我公と云ハ
年所傳ふと松石所傳ふ附此再無伝傳ふ又云

己酉月十の位持賢照代 大猷院様所系不焼失
 仕り受 古井源君所領より中上區の要堀田筑
 おき殿所領主より古事親王先親より通記載仕り
 是又 市南家様所領より古親王古殿と所
 建より所領致仕り給ふ中傳より古親王より古
 内方親王古殿之を三毛谷と世上に中傳より所城
 所殿より鬼の傳所代より古信所領致仕り給ふ
 一漢文字の福龍版子彫りより古所領より古殿
 よりけりより古殿より古殿より古殿より古殿
 一此舊領の所再建より古殿より古殿より古殿より古殿

引手等の物を都る古車の内致りより古殿より古殿
 古殿より古殿より古殿より古殿より古殿より古殿

○古河田所

淨土宗 後沼
 弘治寺系

所系

大連山

古殿致格不

隆岩寺

寺記畧云隆岩寺茂端文祿四年末ニ建立小笠原
 秀政公法號兩選院殿義叟玄大居士右奥方峯高
 寺殿高月峰蒼智廓大禪定尼 信康公之御姫君
 東照宮御養女ニテ御入興御寶塔御位牌有之云

寺領三拾石草創之藪附てあるを蒙長中御弟
引替とも又云此三十石はもと弘安石持に永井氏に
候とあり滋雲陽殿西に向料除地拾石に附開山と
二代お導寸和為隠居の故元弟橋村子磨吉の兄を
五之御弟平之内寸石引多て移居又隱居者と号し
今猶存

テ病没セリサレド其墓不詳小笠原家記録ニハ
正麟寺ニ葬ルトアレトモ今其跡見エズト云々
以上余夢々ばく吉原石所北裏四ツ家ヤといふ地内字子名
正麟寺といふ所ありそより寛政五年石塔を基
塔なり方尺を解西西子以清宗徳大禪定門傍
子文祿四年丑月十日と勅セリ大隆寺以清宗徳
大禪定門ハ欠菱也即ち此寺なり小笠原の郎へ
致す因るに塔を此寺子埋ありと云

一鐘樓 銘畧曰下總古河隆岩寺者
一位右僕射源朝臣家康公之元子 岡崎三郎為前大將軍從

御菩提小笠原兵部少輔^考所草創^元之精舎也而開山
笈道上人云々^{年号ハ慶長三寅三月十五日也}鑄直^リ追加^二當寺
者昔年小笠原兵部大輔源秀政^管總州古河城時
文祿四年乙未十月為^二岡崎信康君冥福^所建也
秀政者 信康君之女塔^{室曆八年寅}
一山門之内西側に石塔多てあり

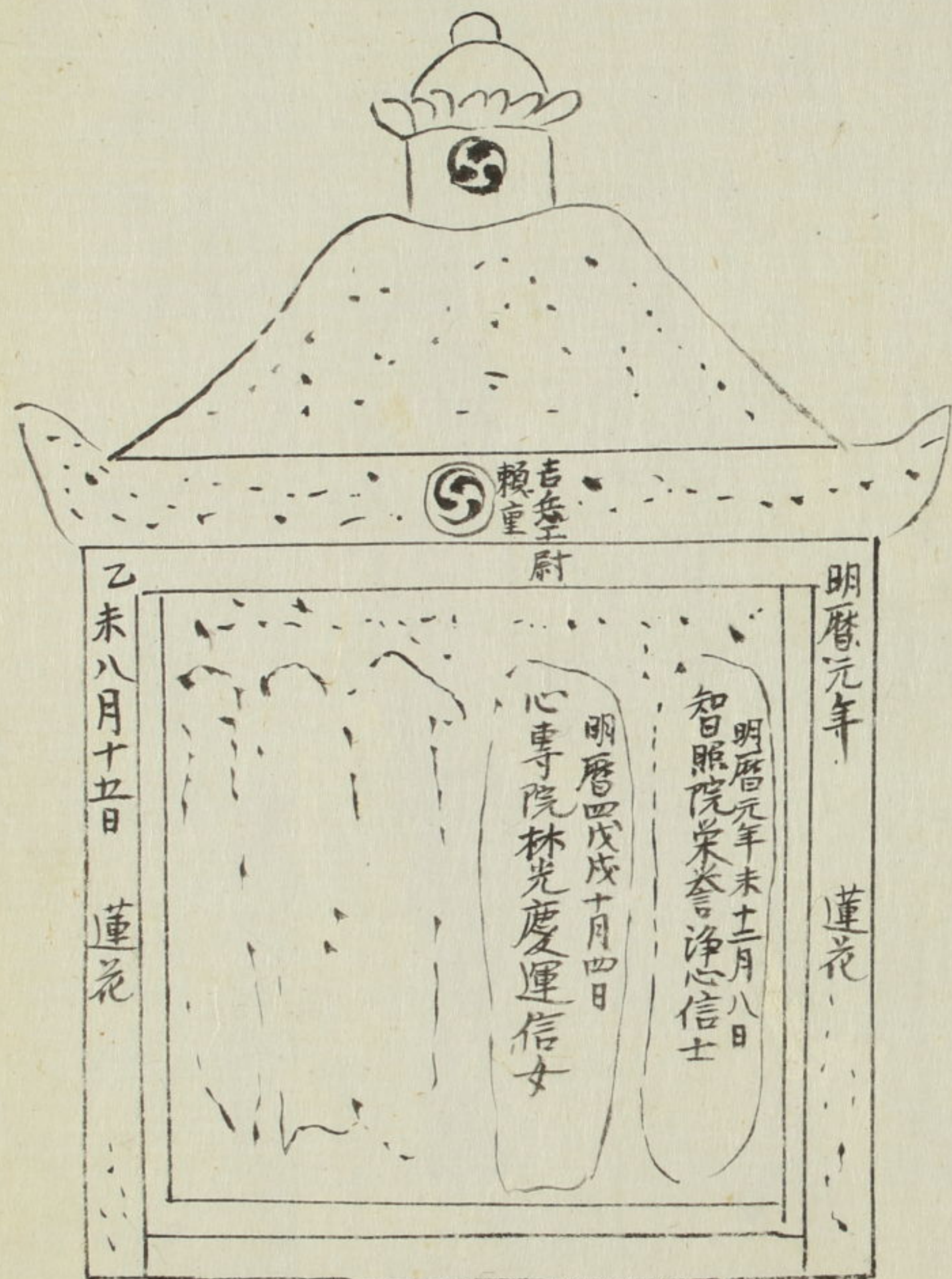
面二

豐安院 空誓性識真道居士
室曆三癸酉天二月十四日
其ハ知り云ふ石に寺側宛勧告あり一三浦紀伊守殿
の墓也其石ハ寛延四年の秋紀伊守殿及甥植村千吉

照三浦塋次墓

横死せられしを祝成すあり多分の神に死せしむる
う利元と云ふ事あり吟味するに全う偽りの死と露殿
はおよひ疑難多きなり此の石は紀伊守殿の墓
きり及後お勤なるうに似るの傍切後をこの石は
要 即先帝豊元寺方と云ふ事あり
即慈恵を以古河城王本多氏忠臣と云ふ事あり
宝曆三年古河子孫に病死傷を横使し上世を葬
埋せしと云ふ一條を摘要しぬ
一石屋より塚と云ふ形の墓あり古俗の石碑といふ多
中書君治世の時にあたりて一藩臣或日山がらの
多捕りつるより起て一石に数人を殺害し遂に

おのれも自裁しそをたりと世人を一新しを葬
 しある也といふ人少く在りしを子孫に傳へる
 所とて人共多し其墓園とて其墓園ありては
 智照院ハ田中市右衛門父心孝院ハ田中
 母とあり



明暦元年

蓮花

明暦元年未十二月八日
智照院榮壽淨心信士

明暦四年戊戌十月四日
心孝院林光慶運信女

乙未八月十五日

蓮花

二面ハ女不のり
 なり又えなれ
 とし好の三基
 考く利成り
 常々みりて
 ハ実神の三基
 又利成り
 ふり明り

此年号明暦元年と四年とありてハ所子執事云といふ
 子あを氏上明暦ハ 先帝は示さるしめたる
 なるも本多家の以ていふも趣難せり又或人山を
 塚といふ実を稲荷祠のうらも子なる四基をい
 ふ也と云

明暦二丙申年
 心養淨本信士
 八月廿五日
 林清院嘆養栄任信女

背二
 股部三之丞吉保

明暦二丙申年
 月心秋慶信士
 八月廿五日

股部左衛門

明暦二丙申年
 檀芳栄心信士
 八月廿五日

股部角也

明暦二丙申年
 惠秋智玄信士
 八月廿五日

角田八郎兵衛

是も明暦の年號也彼記云々田中吉之助の名ハふ
 き絵帳等子こ多れといつてをそれとされたもの

○古河新所

市第系
 古河十五名

曹洞
 武州成田
 禪宗
 五羽山
 大聖院

山王社 一字

氏康の女子
 あは氏綱
 の女も氏康
 の姉妹也

武州成田龍淵寺記 畧云北条氏康ハ古河御所晴
 元年十月三日卒ノ法名大聖院殿東陽岱公大居
 士ト号ス古河ノ御所晴氏公妻ノ御父氏康公菩

提トノ城中ニ一寺ヲ建立シ氏康ノ法名ヲ取テ
大聖院ト号ス此時暗氏ノ執權ニ築田中務大輔
ト云者アリ此人ヲ奉行トノ大聖院造営ヲ司ラ
シム此築田ハ同州関宿ノ城主ナレハ寺成ニ後
暗氏公ニ願ケルハ吾カ菩提寺ノ同州関宿ニ六
國峰山王山東昌寺住僧ヲシテ此度新地大聖院
ノ住持ト仰付ラルヘシ暗氏公早速ノ御免許有
テ仰付ラレケレハ山王山住持ノ僧難有ト領掌
シテ大聖院ニ移錫ス此時東昌寺鎮守ナリシ山
王権現ヲ大聖院寺中ニ勧請シテ法輪不退ヲ護

セシム其後築田ト相州小田原氏康公ノ嫡男氏
康公ノ嫡男氏政公ト不和ニナリ殊ニ古河ノ御
所ヘモ万事不奉公ノ心底見エケレハ暗氏公憤
ラセ給ヒテ出仕ヲ停止セリ築田元ヨリ勇志ノ
武士ナレハ主人暗氏公ニ伏セヌ此ニ因テ大聖
院ヲ破却シ常什物ヲ離散シ住持ヲ誘ヒ本州関
宿ノ城ニ歸テ立籠ル暗氏公大聖院ヲ破却シタ
ルヲ差置ガタク思召シ早速ニ再興ノ御心有テ
佐野ノ城主盛綱ヲ召サレ再興ノ事宜ク取計ヘ
キ由仰渡サレ盛綱領掌シテ寺地ヲ城外坂間村

ニトシテ造立ス諸堂結構以前ヨリ一倍ニ勝ル
大聖院寺号ヲ改メ永昌寺トス成就ノ後盛綱晴
氏公ニ願テ大朝和尚ヲ開祖トナサニテ欲ス
右ノ大朝ハ成田龍淵寺才三代惟通和尚ノ神是
ニメ道德兼備ノ大禪師也我モト本国下野ニ一
寺ヲ立テ請メ開山ト奉敬セシニ聊ノ事ニ付テ
錫ヲ留メス退院ス我後悔頻リ也ト虽凡詮方十
ク過ツルニ近頃聞ク下野榎本總德寺ニ在テ道
凡ヲ施ス由今般ヲ幸ニ一寺成就ナレハコノ大
朝和尚ヲ請メ開山トナサニト頻ニ申上ケレハ

晴氏公甚御悦喜有免許シ給フ盛綱自總德寺ニ
至レハ晴氏公モ寺ニ来テ師ノ礼ヲナシテ恭敬
ス後ニ又永昌寺ヲ改テ玉龍山大聖院ト名ツク
又其後古河ノ城主坂間村ヨリ今ノ南新所ノ寺
地ヘ移ス忝モ此寺御當家ヨリ御朱印拾五石賜
リ永ク佛法不退タラニテ宣下アル坂間村ノ
内ニ今ニ至テ大朝和尚手ツカラ開キ給フ田ア
リ落命ノ塔處ハ少シノ杉林ノ内ニ在大聖院ニ
テ示寂ス丑月十三日也上巳

今坂間村ノ訃落沼といふあり里俗云昔某田主有テ大聖院を
被却也一時擡障を沈めしむの名じと我聞古記を考

予子孫田畝一つふ城内を
時とありふ富

一 小山家祿云此寺開基亨祿九年戊子也據云亨祿九年戊子也
元亨し仍る九年ハ元亨の誤し元年ハ戊子に就満ちの記を以て
バ氏康の善終の爲に并置して並に氏康の院を以て之
の号とせしとあり氏康卒せしハ元亨元年の事なり
年ハ元亨とありハ字修年ハ元亨元年の事なり
の法号を以て之とありハ字修年ハ元亨元年の事なり
中ハ亨祿といふとありハ字修年ハ元亨元年の事なり

一 許我志畧云中古治乱記云北条氏康ハ諸道ノ達
人和歌ハ逍遙院殿門扉ニテ関東ニハ其道無双
ノ歌人也其上國家安全ニ治ケレハ軍兵ノ從フ
一 凡ノ草ヲフスニ似タリ氏康亨祿三年六月十時
六 武州小澤原以來一生ノ戰場勝利廿六度一度

モ歎ニ總ヲ見セス又謀モ賢ク可謂近世良將然
可築墳墓於小田原予ト評定アリシカドモ此處
ハ早雲公有墓所上ハ無益也下總國葛飾郡下河
邊莊古河御所足利晴氏ハ氏康ノ妹婿ナレハ當
所ニ可築墳墓也ト御所有承諾則古河城下建立
會下寺号大聖院立位牌上或人曰晴氏室号芳春
院位牌安置大聖院云々

一 鐘樓 鐘銘駐下総州古河城大聖禪院者實足利
御所之所創造前於坂間邑号永昌大朝和尚回住
之後迨相州之北条畧八州之地而併是院改大聖

大聖乃氏康之廟号當時為一城之巨利不媿稱振
鐸自後牧主數代城市陵替寺亦隨微且罹回祿器
具固有云今之寺主玄公舊事稍復其徒鳳瑞与梁
智募化四隣有年于此茲歲甲寅之秋既而鐘成畧
此終久を以て考建い山記より云祿とあるも三月又為落泥
の故より実より終りつれとも定まらざる

○古河橋所

曹洞

禪宗 古河橋所
古河橋所
古河橋所

融昌山

正禪寺

古河橋所より小川に至る所を并々考へて
記取焼失始ハ石所小

山記編子三
年とある故に
山記編子三
年とある故に
山記編子三
年とある故に

表より年々を考へての所へ梅をといひ傳ふ中より家ハ
て山十八年信長松本より當歸寺移る所を三河の長
といふ所よりけりといふと正禪の寺名の法名に位牌三座
あり

一長時院殿麒麟正禪大居士

大膳大夫長時法号

一犬隆寺殿以清宗得大居士

右近大夫貞慶法号

藩藩藩子數更政う祖父信長寺を所り時甲州武田信
と戦ひ寺を所りて又廿五年六月二日枯瘦う所の戦
あけりて深志城よりたてあも建てもかたつて一城を
信長よりあけりて一更の寺名に遷へられて城より寺
よりりてむ三男を寺名より寺名を所りて城田より寺より

より武田滅亡して将甲斐後濃平國と改題ぬる事信
濃いおふれを急ぎ下りて討隨ふべき

徳川氏も下知ある所の塩尻といふ所へ忍び居る地
下人等を備兵も累代の主君が里とて随ふの少
なくなりやうく多勢の子らぬも深志を多く入れ
る事廿八歳の時にも再び布告へ賜ひしを越えり
あひて書付の文を賜ひしをいへ使をたて送むと
は其時手近く使をよきとて死せしとて将兵
其城は頼子随ふ又小糸子随ふとて随ふ

徳川氏もふたゝひありしをいへ西十二歳石川伯耆守
親正長治を去る事あるとていへ其時久松より人使をも

引使ししをいへ其時云々云々といふ事とていへ其時
の如くいへ其時云々云々といふ事とていへ其時
十四年又徳川氏関白中よりいへ其時云々又
徳川氏も久松はいへ其時云々十八年関白殿中より
城に臨みし時久松もいへ其時云々いへ其時云々
いへ其時云々いへ其時云々いへ其時云々いへ其時
子長治殿のいへ其時云々いへ其時云々いへ其時
いへ其時云々いへ其時云々いへ其時云々いへ其時
五月十日久松卒ありとていへ其時云々いへ其時
西暦もいへ其時云々いへ其時云々いへ其時云々
いへ其時云々いへ其時云々いへ其時云々いへ其時

隆安寺の系
引名... 當時の正統寺住持ハ急リ隆安寺主
僧ハんき、ある故邸より出立来家へつけ志々せお
のれりちよふ古墓を引とり埋てありと

一系図

長棟信濃守 長時大膳大夫 貞慶右近大夫 秀政上野介信濃守

忠脩信濃守

忠貞從四位右近將監

○古河船渡

曹洞

禪宗江戸三田切屋末

龍溪山

永井寺

師弟系
古領五拾石

寺記畧云五十石ハ寛永三寅五月廿五日

御朱印ニ致シ頂戴其後代々領馬當時開山江府
三田聖坂功運寺三世和尚勸請二世和尚顯佳名
于鳳嗣蒙 勅許遂参 内奉拜 龍顔時賜日

山佛光禪師

一小山家記云御朱印地下野國都賀郡大谷田村寛

永三年丙寅開基也

一許我志云開基ノ永井若家ハ今和州新庄一万石

古河ノ時ハ八万九千石余也

一古永井侯墓碑寺内ニ在リ左ニ記ス

右近大夫永井月舟居士碑銘

民部卿法印夕顏翁道春誌

居士姓大江氏永井諱直勝產參州時永祿六年癸亥之歲也自幼齒仕

東照大神君經歷遠參二

州間天正十年夏五月

大神君到江州安土謁

織田信長公甚欣賞之治具盡禮時諸家臣數輩于別席設膳公自以著配肴款居士在其列既而

大神君入洛公亦到洛在本能寺公勸大神君

遊覽泉壩六月公為其下明智光秀被弑京師大亂大神君聞驚慮道梗不利而欲東歸乃發泉壩經木

津過伊州自勢州駕舟而入參州岡崎城是行也往還居士不離左右旬後光秀伏誅十二年春三月信長之子信雄在尾州清洲城與豐臣秀吉公有隙秀吉將擊之信雄請援兵大神君以信長舊好故許之秀吉遣其將池田勝入以突騎攻尾州大山城大神君率兵救尾州與信雄同化小牧山居士從行焉秀吉大軍入犬山夏四月秀吉謀密使勝入自間道襲參州大神君聞之潛出小牧山逆勝入戰于長久手居士執鎗奮擊勝入得其首敵大敗走時居士年二十二入皆服其勇勝入者世所謂驍騎也

居士之功於是多矣冬十月秀吉畏大神君
遂与信雄和平而去其後大神君之家臣若干

勅授從五位居士亦在其中其他列國老叙位者鮮
矣文祿元年秀吉擊三韓集群國兵肥州名護屋

大神君往會焉一日秀吉詣

大神君軍營見居

士曰彼何為者衆曰永井右近者也秀吉曰取勝入
首者是乎衆曰然曰嘻壯士也聞者歆羨之慶長三

年秋八月秀吉公薨國兵馬之權入

大神君

掌握五年之秋石田三成叛大神君自將討之
使諸將大戰濃州關原戮三成等居士列千隊頭速

大神君之開幕府也遣居士就山崎細川玄吉尋前

代桺當礼義故事蓋是欲損益隨時也十九年之冬

大坂之役居士亦隊頭明年夏大坂城陷豐臣氏殲

矣凱旋之時有旨減否群士沙汰諸隊功過已證賞

罰固當而獨屬居士者進止唯隨其意而定之官命

令無論焉居士之名於是籍甚矣元和二年夏四月

大神君即世居士自駿州到江戶仕台德院殿

大相國乃賜常州笠間城以增封戶五年大相

國在伏見城福島正則留滯江戶以其違國法修繁

廣嶋墨故命山陽南海兩道牧守以其衆收安藝備

後二州時遣對州太守安藤重信與居士往諭正則
家人苗守廣島三原者其行裝所帶受降如受敵也
苗守懼而從命乃取兩城收二州正則罪不可原而
関原軍功減一等放于越之後州八年以羽州最上
郡賜鳥井氏然旧刺史之士卒猶守山方城會正純
有罪於是草騎騁末密告居士及鳥井氏以命旨數
正純罪狀左遷于由利是年命居士改望間賜終只
古河城彌增米地然常侍江府有棠陰聽訢則居士
預會焉功成名遂恩眷尤深寬永二年乙丑季冬二
十九日嬰病不祿時年六十三 大相國甚哀惜時

之及此焉世人亦多悲慕之葬于古河永井寺長子
信州太守尚政嗣封益楊家声預聞國政十年春三
月今 大君幕下更古河賜城州從城復益其祿
且以城州長岡賜尚政之弟日州太守直清以為食
邑直清久事幕下夙夜不懈常被親近眷遇日厚
是其恩賜之榮盛而居士之餘慶也嗚呼懿哉今茲
臘月者居士之十三回忌也其追遠之情不易言也
唯恐居士威名勇功雖顯當世不岳於無窮故欲刻
樂石而遺芳蹟於是求余並詞余曾識居士久矣又
於日州猶識韓也故不能固辭遂為之辭系之以銘

曰

永井家譜大江之後赴武夫在君左右弱冠擊敵
于長久手短兵急接勝入授首富父椿秋関羽斬良
昔人稱美今優見剛関原之役大坂戰場有豫有旅
之紀之綱笠間古河食祿數万鎮干一方賜以鉞奉
偉哉將種天使滋蔓龜趺戴石百世傳遠

居士卒後十三回寛永十四年冬十二月廿九日從
土位下日向守永井直清立之

一永井家の由統管親武監并萬箇稱等子委
之元々水と事そりて思ふ武家並衰記の云哉

畧記也

七万六千三百石

永井信濃守為本

信濃守為政父子傳々右記を屬ける子其程を
寛永十年為年三万石の内如増之下山城國浪城不
勢也 傳々於名十方石子其程を屬ける子其程を
正保元年於四位傳於子其程を屬ける子其程を
傳於子其程を屬ける子其程を屬ける子其程を
為征云 寛文九年二月本言を以て母存宮内卿一
而勢延元年江戸より病死婦子其程を屬ける子其程を
を以てける子其程を屬ける子其程を屬ける子其程を
とし家人其を以て其程を屬ける子其程を屬ける子其程を

三郎為長女曾稱土佐守信濃守と改らる云々
其妻者故を前められ延寶四年六月十日於馬
方無監物と座禪する終る事 上寺平河才
は傳ぬる云々永井信法も亦無監物と定め
故陣禪ハ止る事其子同ハ年 家獨公薨
終ハ云々於増上寺六月廿四日より歸俗するある事
其永井尚長 市名代也 傳有彼寺にお後ハ至
日廿五日丙辰和泉守右衛門為子横死せり時
廿七日未時室あぢく生れぬ事傳へて社人を催
儀する人底故に和泉守子討つ事と云
其種忽ち餘地を五石より約めし事代高寺云
の故より是ち名の傳おまじりしと云

○古河江戸所

小山親高の因微

一許我志畧云薙髮ノ二劔ヲ帶ル一種ノ浪人也
寺ト稱スルハ故觀音寺ト云ニ廢堂アリ政種没落
ノ後初テ古河公方ノ食客トナルトモ關東古戦録
ニ由テ見レハ小山家ノ亡タルハ北條氏政ニ由テ太
閤ニ殺キテ故ト見エタリサレバ天正十八年古河公
方モ絶エテ後ノ一ニメ古河侯ハ小笠原氏ナレバ
此説ハ疑フ可シ其公方家ヨリ賜ル所ノ地一町二畝
廿九歩今ニ領セリ畧家ニテ萬病圓ヲ鬻クハ全ク

利ノ為也ト

一 亦月ノ茶師如某の條を安置一毎夜正月の諸人ノ
私にせしむる花の人群集せり此佛條と万病の
越後國等ノ茶師より感得し一多也とありて之傳
へし事なりと云

一 先年書あけの秋去たる通

先祖政種ハ後系於長秀人ノ子孫能く山城を弘
治年中皇子細吉河子信長古河公方晴氏公より
為家ね領仕其子國琳内水子孫お結し外郎然
意より懐妊し事野氏ノ女を國琳妻とて下里
出生い多一知名を記し而して其跡より廣光のセ刀

を授け婦家断絶せしむる不便より其父を今更永井
万子孫を其父公新親子とて万儀賜ふ新親子ハ其後
家より其父

○古河西倉道所

淨土宗 西本願寺末
足立山野國隆

宗教寺

淨土宗と云
ハ無山院禪寺
よりあると云
新親子
と云なり

一 開山者昔親賢聖人の中子西念房也已存中絶セ
一 親賢聖人なる念と云僧再興其
ハ山家記
西念房道秋ハ供姓井上西郎重長といふ者の嫡子武
治足立郡野田の三郎太郎重久の以男井上次郎道
祐といひて親賢聖人の中子也古河子名宗を字とす子

此の糸神綿荷也小蓋ハ下の字ともやと内多収
里老のたふ綿荷ハ五穀事務を掌る弦の神
一と云れ此方の田畑の爲に節候一と云ふ小婦
といひ畑をハ電を降し給ふ故此處ありの村
よく豊作の程より電除祈禱といふ事とを修
むる水乃ち畑をふくをさるなりといひま
なり此所の畑に電を降るを此神をまつた
て蓋をさといふ事より此名也小ハ大と云ふ
づり世間のそのふる里外に何れも此神をまつ

2125

